

対馬歴史観光 ガイドブック

～国境の島 交流と国防の最前線～



対馬観光物産協会

万松院の三具足（対馬市巖原町西里）

交流と国防の最前線 ～国境の島・対馬（つしま）の歴史～

九州と朝鮮半島の間には浮かぶ長崎県の島・対馬は、最終氷期（7万年前～1万年前）には大陸・日本列島と陸続きだったと考えられており、ツシマヤマメコに代表される**大陸系の動植物たちが生息**していました。最終氷期が終わり、温暖化が進むにつれ対馬はふたたび孤島となり、生き物たちは独自の生態系を築いていきました。

対馬北部の越古遺跡（7000～8000年前）からは九州の土器・黒曜石と朝鮮半島の土器が出土しており、対馬が孤島に戻ったのちも**九州と朝鮮半島を小船で往来**する人々がいたと考えられています。

やがて、中国大陸に古代文明が誕生すると、日本列島にもさまざまなクニが形成され、中国の文献に登場するようになります。対馬は、**魏志倭人伝（3世紀）に最初に登場する倭国（日本）のクニ**として描かれ、古くから日本と大陸を結ぶ**海上交通の要衝**でした。

朝鮮半島まで49.5キロに位置するにも関わらず、4世紀後半には畿内系の高塚古墳が対馬にも出現し、「古事記」の国生み神話では本州や九州とならんで最初に創造される国土（大八島国）として描かれるなど、**一貫して日本の国土**として認識されていました。

古代、倭国はたびたび朝鮮半島に進出していますが、白村江の戦い（7世紀）で唐・新羅連合軍に大敗すると、朝鮮半島での足がかりを完全に失ってしまいます。戦後、朝鮮半島は新羅によって統一され、倭国もまた中央集権化を推し進めて「日本」という国号を定めると、対馬は**日本と朝鮮、時には中国やモンゴル、ロシアなど複数の国家の交流と軍事的緊張の影響を強く受ける**ようになります。遣隋使、遣唐使（初期）、防人、遣新羅使、元寇、倭寇（初期）、朝鮮出兵、朝鮮通信使、日露戦争など、日本と外国が交流・対峙する時、対馬はその最前線となり、独自の歴史が刻まれてきたのです。もし対馬が存在しなければ、日本の姿は、今とはまったく異なったものになっていたはずです。

国境の島・対馬から「日本」を見つめなおす歴史の旅に出てみませんか？



対馬観光物産協会

〒817-0022 長崎県対馬市厳原町国分1441
対馬市役所1F
TEL 0920-52-1566

対馬観光のお問い合わせ・観光パンフレットのご請求は当協会まで。



対馬観光ガイドの会 やんこも

「やんこも」（対馬の方言で「たくさん、何度も」の意味）は、プロの観光ガイドや教職員OBなどが中心になって結成された対馬の観光ガイドの会です。城下町散策やトレッキングのガイド事業を行っています。対馬の激動の歴史を、わかりやすく楽しくご案内いたします。

※事務局は、上記の対馬観光物産協会内にあります。

【空 路】

ANA 対馬空港 ⇄ 福岡空港 1日4便
 TEL 0570-029-222
 ORC 対馬空港 ⇄ 長崎空港 1日4～5便
 TEL 0570-064-380

【海 路】

九州郵船株式会社 (旅客フェリー・ジェットフォイル)
 TEL 092-281-6636 (博多港)
 壱岐・対馬フェリー株式会社 (貨客フェリー)
 TEL 092-725-1162 (福岡発着所)
 対州海運株式会社 (貨客フェリー)
 TEL 092-712-2057 (福岡本社)
 福岡(博多港) ⇄ 対馬(厳原港・比田勝港)
 1日1～2便



対馬の地図に関しては、「対馬まるわかり! ガイドマップ対馬」(通称ヤマネコマップ)があると便利。観光パンフレット・地図の請求は、対馬観光物産協会 (TEL 0920-52-1566) まで。

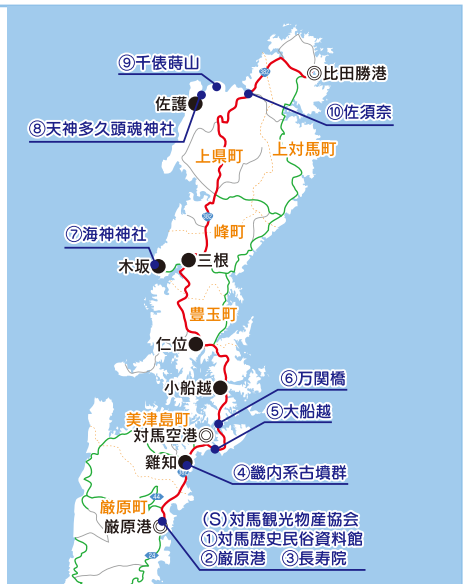
1. 「街道をゆく」 対馬の道をたどる



「坂の上の雲」「竜馬がゆく」などの歴史小説で知られる国民的作家・司馬遼太郎氏は、新聞記者時代に青木幸次郎氏（対馬出身）のすすめではじめて新聞小説を書き、それがのちに直木賞受賞作「臬の城」になりました。紀行エッセイ「街道をゆく」で司馬氏が訪れた道をたどりながら、対馬の歴史にふれるコースです。

コース所要時間・コース図

- (S) 対馬観光物産協会 ←
- ↓ ①まで徒歩1分
 - ①②③ 厳原城下町散策（1時間程度）
 - ↓ 車で15分
 - ④ 美津島町雑知・畿内系古墳群
 - ↓ 車で7分
 - ⑤ 美津島町大船越・大船越瀬戸
 - ↓ 車で7分
 - ⑥ 美津島町久須保・万関橋
 - ↓ 車で50分
 - ⑦ 峰町木坂・海神社
 - ↓ 車で45分
 - ⑧ 上県町佐護・天神多久頭魂神社
 - ↓ 車で10分
 - ⑨ 上県町井口・千俵蔭山
 - ↓ 車で10分
 - ⑩ 上県町佐須奈
- 車で115分



コース説明

「街道をゆく13 壱岐・対馬の道」（朝日新聞社）は、司馬氏の新聞記者時代の同僚・青木幸次郎氏（対馬出身）の思い出から始まります。

1977年（昭和52年）、作家仲間の金達寿（キム ダルス）氏らとともに対馬を訪れた司馬氏は、巖原港で「暴走タクシー」と遭遇し、郷土史家・永留久恵（ながどめ ひさえ）氏と出会い、対馬北部の上県町佐須奈（かみあがたまちさすな）を目指します。司馬氏の思索は、古神道、魏志倭人伝、万葉集、倭寇、朝鮮通信使、そして朝鮮、中国、北方アジアの蒼穹（そうきゅう＝青空・天空）へと広がっていきました。

対馬は、魏志倭人伝で最初に描かれる倭国（日本）の一部であり、古代から現代まで、外国との交流と緊張の歴史が刻まれてきました。壱岐・対馬訪問前に「街道をゆく」を読むと、両島への旅がより楽しく充実したものになるはずです。

観光スポット紹介「城下町歴史散策」（巖原港周辺）



①長崎県立対馬歴史民俗資料館

司馬氏を驚かせた「告身」（朝鮮国王から対馬の有力者に与えられた辞令。国指定重要文化財）が現在も展示されています。対馬藩が代々記録してきた12万点を超える宗家文書のうち、約7万2000点が収蔵されており、現在も整理・分析・記録などの作業が継続的に行われています。

→資料館情報 P34



②巖原港（いづはらこう）

対馬南東部に位置する巖原港は、古い歴史をもつ海の玄関口で、近隣には飲食店や宿泊施設、対馬市役所（1Fに対馬観光物産協会）などがあります。巖原は、対馬藩主・宗家（そうけ）十万石の城下町として栄え、江戸時代の石垣や国指定の史跡が集中する歴史ゾーンとなっています。



③長寿院（ちょうじゅいん）

長寿院には、江戸時代に活躍した儒学者「雨森芳洲」（あめのもりほうしゅう）の墓所があります。司馬氏は早朝の散歩の途中、芳洲のお墓参りを済ませた李進熙（リ ジンヒ）氏（旅の同行者・考古学者）と出会います。芳洲は現在、その善隣外交の思想が高く評価されていますが、当時はまだまったくの無名でした。

観光スポット紹介「対馬を北上する」(美津島町～峰町)

巖原の散歩を済ませた司馬氏一行は、地元の郷土史家・永留久恵氏とともに国道382号線を北上します。峰町三根でバスを降り、タクシーで木坂の海神神社へ。さらに上県町佐護、佐須奈へと旅を続けます。通過する地域は限られているのですが、司馬氏の思考は時間と空間を自在に移動し、読者を二千年の時空の旅へと誘います。



④畿内系古墳群

美津島町雞知(みつしままちけち)には、出居塚古墳(4C後半)、根曾古墳群(5～6C)、サイノヤマ古墳(7C前半)などの畿内系古墳が集中し、畿内政権の影響を受けた古代対馬の中心地があったと考えられています。時代は、南北市籙(魏志倭人伝)から朝鮮半島出兵(好太王の碑文)に変わっており、対馬はその前線基地だったのかもしれませんが。



⑤大船越(おおふなこし)瀬戸

もともと対馬本島は南北に連なる一つの島でしたが、江戸時代(1672年)に大船越の瀬戸を掘り切り、東西に往来できるようになりました。工事の期間は半年、労働力は延べ3万5000人。「17、8世紀のオランダの銅版画にすれば美しいものができるのではないかと思われた。」(街道をゆく)



⑥万関橋(まんぜきばし)

明治時代、ロシアの南下政策に対抗するため浅茅湾内の竹敷に海軍要港部が置かれましたが、大船越瀬戸は水深が浅く艦船を通すことができないため、新たに久須保水道(万関瀬戸)を掘削しました。1905年の日本海海戦では、竹敷を出港した水雷艇・駆逐艦群がロシア・バルチック艦隊に大打撃を与え、日本の勝利に貢献しました。



⑦木坂・海神(きさか・かいじん)神社

「対馬が神々の島であるというのは十世紀の『延喜式神名帳』に記載されているいわゆる式内社だけで29社もあり、これを肥前(長崎県・佐賀県)がわずか3社しかないことにくらべると、よくわかる」(街道をゆく)

※「海神」は「わだつみ」とも読みますが、同名の神社との混同をさけるため地元では「きさか・かいじん神社」と呼びます。

観光スポット紹介「街道をゆく」対馬の道 終着点・上県町



⑧天神多久頭魂(あめのたくずだま)神社

神社建築は、仏教建築に対抗するために生まれたと考えられており、本来は社殿も鳥居もなく、磐境（いわさか、石積み）で結界をつくり、野外の磐座（いわくら）の前で祭祀を行っていました。社殿のない原始神道の様式が残る神社で、上県町佐護に鎮座。「『延喜式』以来、国家に登録された神社でありながら、古代の様式のみままである」（街道をゆく）



⑨千俵蒔山(せんびりょうまきやま)

7世紀、白村江の戦いに大敗した倭国（日本）は、唐・新羅連合軍の侵略を恐れ、防人を九州北部に配置し、西日本各地に古代山城を築くなど防衛体制を強化しました。対馬北西部の千俵蒔山には防人が常駐し、まさに国防の最前線でした。その反面、司馬氏に同行した金達寿氏・李進熙氏にとっては故国に最も近い場所であり、特別な思いがあったようです。



⑩上県町佐須奈(かみあがたまち さすな)

江戸時代の日本は鎖国のイメージがありますが、釜山には対馬藩の在外公館「倭館」があり、数百人の対馬藩士が常駐し、外交や貿易を行っており、佐須奈はその開港場でした。「壱岐・対馬の道」は、司馬氏が食堂でトンカツを注文し、店主の老婦人と会話する場面で終わります。「この人をながめていると、佐須奈まできた甲斐があったような気もした。」(街道をゆく)

こぼれ話「暴走タクシーとトンカツ」

「壱岐・対馬の道」の対馬編で印象的なのが、対馬名物として描かれている「タクシーの運転手の無愛想と暴走」です。今でも「対馬のタクシーは暴走するんでしょ？」とお客様に質問されることがあり、「いや、そんなことはないですよ」と答えるとがっかりする方もいるとか。巖原港から旧対馬交通ホテル（現在は解体）までは車で1～2分ですが、「わずか十分ばかりの距離であったが、城下町の名残りをのこす小路から小路を、すさまじい勢いで暴走した。曲り角など、あっという間にまがってしまう」と書かれており、その道筋は謎のままです。

司馬氏がトンカツを注文した上県町佐須奈の飲食店「かつぱれ」(TEL 0920-84-2055)では、「司馬定食」(1,200円)を食べることができます。もともとは地元住民だけが知る「裏メニュー」でしたが、「坂の上の雲」のドラマ化などをきっかけに司馬遼太郎ファンに食べてほしいと「表メニュー」としてデビューしました。

2. 神々のふるさと、国境の島の神社めぐり



大陸航路の要衝であり、国防の最前線でもあった対馬には、航海守護や武神などの古い神々が鎮座し、古神道の源流のひとつとされています。古代の港や神社をめぐりながら、いにしへの神々の世界を体感できるコースです。

コース所要時間・コース図

(S) 対馬観光物産協会 ←

↓ 車で1分 (徒歩3分)

① 厳原八幡宮神社

↓ 車で15分

② 美津島町雞知・住吉神社

↓ 車で23分

③ 美津島町小船越・阿麻氏留神社

↓ 車で10分

④ 美津島町鴨居瀬・住吉神社

↓ 車で30分

⑤ 豊玉町仁位・和多都美神社

↓ 車で28分

⑥ 峰町木坂・海神社

車で80分



コース説明

平安時代に編纂された「延喜式神名帳」(927年)は、当時の朝廷に認められた「官社」の一覧です。神名帳に記載された神社を「式内社」(延喜式内社)と呼び、西海道(九州)全体で98社107座の式内社が名を連ねていますが、そのうち対馬は九州最多の29社を誇り、2位の杵岐の24社を加えると、2島で九州の約半分を占めることになります。対馬・杵岐は、神道の源流のひとつといえる島々なのです。

対馬には多くの神々が鎮座していますが、特に重要視されてきたのが、海神の娘・豊玉姫(とよたまひめ)と、神功皇后(じんぐうこうごう)です。豊玉姫は「古事記」の海幸山幸伝承に登場する女神で、航海守護・安産・豊漁など庶民向けの神徳もあり、島民に親しまれてきました。一方、神功皇后は懐妊したまま三韓征伐を行ったとされる勇ましい女神で、子の応神天皇とともに「八幡神」として全国に祭られています。神功皇后は九州北部に縁の深い女神であり、対馬にもたくさんの伝承地があります。

豊玉姫は外国への航海の守護神、神功皇后は外国から国土を守る女神であり、これはそのまま対馬の二面性(交流と国防)を表しています。

観光スポット紹介「対馬一の宮・海神神社を目指して」



① 厳原八幡宮(いづはらはちまんぐう)神社

厳原町の中心部に位置し、古くから対馬藩主や島民の崇敬を集めてきた古社です。神功皇后が三韓征伐の帰りに清水山でみずから祭祀を行い、異国の侵略からこの地を守るよう祈りを捧げたと伝えられています。祭神は応神天皇、神功皇后ほか3柱。名神大比定、旧県社。



② 難知・住吉(けち・すみよし)神社

美津島町の中心部・難知に位置し、鴨居瀬の住吉神社から移祭したと伝えられています。住吉の名神大社は、大阪・下関・福岡・杵岐・対馬にあり、大陸航路の守護神として信仰されていました。住吉の祭神は本来ツツノオ三神ですが、難知・住吉神社の祭神はウガヤフキアエズ・豊玉姫・玉依(たまより)姫となっています。名神大比定、旧郷社。



③ 阿麻氏留(あまてる)神社

天日神命(日神)をまつる古社で、浅茅湾と対馬海峡東水道がもつとも接していた小船越(こふなこし)に鎮座しています。「日本書紀」顕宗3年夏4月のくだりに神託を下す神として登場し、この神託により対馬南部豆酸に鎮座していた「タカミムスビ」が対馬のト部ごと上京しました。式内社。



④鴨居瀬・住吉(かもいせ・すみよし)神社

日本神話に登場する海神の娘・豊玉姫が、ここ住吉瀬戸で子神ウガヤフキアエズを出産したと伝えられています。古代から港として栄えた小船越にも近く、海神を祭るにはふさわしい場所です。祭神はウガヤフキアエズとツツノオ三神。入り江には紫色のサンゴ(ソフトコーラル)が多く、「紫瀬戸」と称えられています。名神大比定。



⑤和多都美(わたつみ)神社

豊玉姫と山幸彦(やまさちひこ=ヒコホホデミノミコト)を祭る海宮で、古くから竜宮伝説が残されています。兄の釣り針を探す旅に出た山幸彦は、ここ仁位(にい)で豊玉姫と出会いました。5つの鳥居のうち2つは海中にあり、遠く神話の時代を偲ばせます。裏参道には磐座(いわくら)があり、古代の祭祀の雰囲気をも今に伝えています。名神大比定。



⑥木坂・海神(きさか・かいじん)神社

海の守護神・豊玉姫を祭る対馬国一の宮で、旧社格は国幣中社。江戸時代まで八幡本宮(厳原八幡宮は新宮)と号しており、現在でも神功皇后伝説に由来する放生会などの神事が行われています。伊豆(木坂)山のふもとに鎮座し、約300段の石段を登ると豪壮なつくりの神殿が姿を現します。名神大比定。

観光スポット紹介(オプション)「いにしへの神々」



○多久頭魂(たくずだま)神社

赤米(古代米)神事や亀ト(きはく)などの古い習俗が残る、対馬南西端の厳原町豆酸(つつ)に鎮座する古社で、対馬固有の天道信仰の聖地です。境内に延喜式名神大社「高御魂神社」(祭神はタカミムスビ)が鎮座しています。写真はご神木の「お堂のクス」です。



○白嶽(しらたけ)神社

白嶽は対馬を代表する霊峰で、原生林から石英斑岩の双子峰(口バの耳状)が突き出しており、山自体が巨大な磐座のような神々しい姿をしています。ふもとは白嶽神社があり、白嶽を遥拝することができます。対馬の山岳信仰の総社で、祭神はオオヤマツミとタクズダマ。大陸系と日本系の植物が混生する貴重な植生により、国の天然記念物に指定。



○太祝詞(ふとのりと)神社

対馬ト部の祭神である太祝詞神（天児屋根の別名）を祭り、かつて亀ト（亀の甲羅を使う古代の占い）が行われていました。カヤやケヤキなどの巨木に守られ、霊峰・白嶽のふもとにひっそりとたたずむ延喜式名神大社です。対馬の中央に広がる浅茅湾の南西部・美津島町加志（みつしままちかし）の集落奥に鎮座しています。



○雷命(らいめい)神社

祭神は雷命（イカツチノミコト、水神・男神）で、神社は阿連川の河口近くに鎮座していますが、上流にはオヒテリ（太陽神）という女神がいて、雷命が出雲に出かける神無月の間、里に下りて村を守るといわれています。祭りは子どもからお年寄りまで総出で行われ、雨と太陽が結婚して里に豊穡をもたらす、という古い民俗が今に伝えられています。



○天神多久頭魂(あめのたくずだま)神社

六国史（日本の正史）のひとつ「日本三代実録」に授位の記載がある古い神社で、天道信仰のもうひとつの中心地でした。社殿の無い磐座（いわくら）の祭壇で有名です。対馬北西部、上県町佐護湊（かみあがたまちさごみなど）に鎮座しており、近隣には神御魂（かみむすび）神社、天諸羽（あめのもろは）神社（式内社）などが鎮座しています。



○豊・那祖師(とよ・なそし)神社

日本書紀の異伝によると、高天原を追放されたスサノオは、まず新羅（朝鮮半島）のソシモリに降りますが、その地が気に入らず出雲に向かいます。対馬北部には、スサノオが立ち寄ったという伝承地が多く残されており、いずれも強いタブーの地になっています。上対馬町豊（とよ）の漁港前に鎮座し、スサノオに関係する島大国魂神社ほかを合祀。



○琴崎・胡籙(きんざき・ころく)神社

対馬北東部、対馬海峡に面した琴崎（きんざき）に鎮座。祭神はワタツミ三神で、神功皇后の船の碇が沈み、それを海神・磯良（いそら）が拾い上げたという伝承が残されています。琴崎は、海神を祭るにふさわしい荒々しい自然美の景勝地ですが、琴集落内の胡籙御子神社から山越えの道を歩くため、雑草の繁茂しない冬場の参拝がおすすめです。

3. 防人が築いた古代要塞・金田城を歩く



金田城（かなたのき）は、対馬市美津島町黒瀬（浅茅湾の南岸）にある岩塊・城山（じょうやま）を利用して667年に築かれた古代山城のひとつです。白村江の敗戦によって対馬は国防の最前線となり、東国からやってきた防人（さきもり）が国境の海を睨んでいました。山頂からは1300年以上前に防人が見た水平線を望むことができます。当時の石塁（城壁）などの遺構がよく残り、国の特別史跡に指定されています。

コース所要時間・コース図

(S)対馬観光物産協会 ←

↓徒歩で1分

①あらおどん（伝・志賀荒雄の墓）

↓徒歩で1分

②巖原町今屋敷・万葉画・防人の島

↓車で30分

③美津島町箕形・県道24号線城山入口

↓車で12分

④城山登山口

↓徒歩

⑤⑥⑦金田城探訪（3～5時間）

↓徒歩

④城山登山口

車で42分



コース説明

7世紀、朝鮮半島では百済・新羅・高句麗の三国が抗争を繰り広げており、倭国（日本）は半島南部の百済と同盟関係を築いていました。660年、唐・新羅連合軍が百済を滅亡させるという事件が勃発し、百済の救援要請を受けた倭国は朝鮮半島に援軍を送りますが、663年「白村江（はくそんこう、はくすきのえ）の戦い」で大敗。唐・新羅が日本本土を侵略するおそれが生じたため、664年、壱岐・対馬・筑紫などに防人・烽（とぶひ＝のろし）を設置し、西日本各地に古代山城を築き、大陸からの侵略に備えました。

初期の防人は主に東国から徴発され、道具や食糧は自前で準備、任地に到着してから3年間を自給自足しながら警戒にあたりました。農村では徴発により深刻な労働力不足がおこり、また生きて任地から戻る保証もないため、防人本人にとっても家族にとっても非常に重い負担でした。万葉集の「防人の歌」の大半は、望郷の念や、故郷に残してきた親・妻・子どもたちへの想いと惜別の情に満ちています。

金田城（かなたのき）は、天然の地形を利用した山城ですが、日露戦争時に要塞化され、山頂近くまで軍道がつけられています。登山口から山頂までは往復90分、城戸（きど）などを見ながら歩くと合計4時間ほどかかり、要健脚のコースになります。

観光スポット紹介「巖原市街地」



①神功皇后の腹冷やし石

対馬市役所前の桜橋公園の一角に、高さ1mほどの石柱が立っています。三韓征伐に乗り出した神功皇后が、対馬に立ち寄った際に産気づき、この石で腹部を冷やして出産を延ばしたと伝えられています。神功皇后伝説は、日本の対外進出や白村江の敗戦など、外国との緊張状態のなかで対馬・壱岐・九州北部を中心に広がっていったと考えられ、島内に多くの伝承地があります。



②万葉画・防人の島

万葉画家・鈴木靖将氏の作品で、2009年に対馬市に寄贈され、対馬市交流センター3階に展示。「対馬の嶺(ね)は 下雲あらなう可牟の嶺に たなびく雲を 見つつ偲(しの)はも」(巻14-3516)という歌を題材にしたもので、若い防人が遠く離れた恋人に想いをはせる情景を、巖原町の豆碓崎を舞台に描いたものです。

観光スポット紹介「金田城を歩く」

金田城がある城山は標高273mの巨大な岩塊で、本来は簡単に行くことができない地形ですが、日露戦争前に城山砲台が建造され、山頂近くまで軍道が整備されています。



③美津島町箕形・県道24号線城山入口

対馬観光物産協会（対馬市役所）から国道382号線を北上し、十八銀行美津島出張所前の交差点を左折し県道24号線に入ります。竹敷・箕形分岐点（標識あり）を直進し、県道を道なりに進み、右手に写真の「城山入口」の看板が見えたら細いセメント道へ右折すると城山登山口への道路です。



④城山(金田城跡)登山口

県道城山入口から登山口までは約1.8キロの狭い道で、乗用車程度の車両しか通行できません。セメント舗装の道から未舗装の道に変わり、最奥部に車が数台駐車できる小さな広場があり、説明看板・国指定特別史跡の石標が建っています。



⑤南西部石塁

うっそうとした森の中に、小さな万里の長城のような状態で石塁（せきるい）が残されています。福岡県の大野城など、他地域の古代山城では土塁（どるい）が多用されていますが、金田城は、石塁と天然の断崖絶壁によって守られています。



⑥城山山頂

山頂からは、防人も見たであろう水平線を望むことができます。1300年前とほとんど変わっておらず、気象条件によって朝鮮半島が見えることもあります。砲台跡がある広場を山頂だと思ってしまうのですが、山頂はそこから左手側の細い山道を少し登ったところにあります。



⑦一ノ城戸(いちのきど)

城山を取り囲む城壁の一部に、城戸（きど、城門）が設けられています。城壁の内部に入るには城戸を通る必要がありますが、水流が海辺へと流れ出る谷間は、外部と出入りがしやすく、食糧などの輸送がしやすい反面、敵に侵入もされやすいため、高い城壁と門を築いて防御力を高めているようです。

観光スポット紹介（オプション）「海から見る金田城跡」



金田城は、海から望むことにより、その立地条件や存在価値をよりいっそう理解できます。シーカヤックツアーに参加する方法と、渡海船をチャーターする方法があります。シーカヤックツアー、渡海船については、

対馬観光物産協会

TEL 0920-52-1566 まで。

万葉集 防人の歌

東国で徴兵され、荒海として知られた玄界灘を越えてやってきた防人たちですが、その後彼らがどうなったのか、知るすべはありません。事故や病気で命を落とした者、無事家族の元へ帰った者、島の住民となった者もいたかも知れません。防人の多くは無名の庶民ですが、万葉集に歌を残したことで日本文学史上に大きな輝きを残しました。彼らの歌をいくつか紹介します。

今日よりは 顧みなくて 大王(おほきみ)の 醜(しこ)の御楯と 出で立つ我は

今日からは 振り返らないで 大君の つたない護りとして 行くのだおれは

父母が 頭(かしら)掻き撫で 幸(さき)くあれて 言ひし言葉そ 忘れかねつる

父母が 頭を撫でて 達者でいろやと 言ったことばが 忘れられない

唐衣(からころも)裾に取りつき 泣く子らを 置きてそ来ぬや 母(おも)なしにして

旅装の 裾に取りすがり 泣く子供を 残してきたことだ 母親もいないというのに

防人に ゆくは誰が夫(せ)と 問ふ人を 見るが羨(とも)しさ 物思(も)ひもせず

「防人に 行くのは誰の夫」と 問う人を 見ると羨ましいことだ 物思いもせずに

金田城トレッキングの注意点



城山は比較的整備されているのですが、登山口までの林道が細く（乗用車以下通行可能）、また城戸や大吉戸神社へ続く海沿いの道はいくつか分岐点があり、初めての方は迷うことがありますので、ガイドつきのトレッキングをおすすめします。

対馬観光ガイドの会やんこも

（対馬観光物産協会内）

TEL 0920-52-1566

4. 悲劇の遣新羅使と万葉集



万葉集（まんようしゅう）は、天皇・貴族から庶民・防人までさまざまな人々が詠んだ4500首以上の歌を集めた日本最古の和歌集です。万葉集全20巻のうち、巻20の防人（さきもり）の歌（巻13、14にも含まれる）、巻16の志賀荒雄（しかのあらお）の死を悼む歌、巻15の遣新羅使（けんしらぎし）の歌が、対馬と深いかわりをもっています。万葉集に描かれた古代対馬の文学ロマンを味わうルートです。

コース所要時間・コース図

(S)対馬観光物産協会 ←

↓車で14分

①上見坂公園

↓車で25分

②③美津島町竹敷・たかしきのみみじ

↓車で13分

④美津島町雑知

↓車で31分

車で46分

⑨美津島町鴨居瀬・住吉神社

※歌碑は9基あり、上見坂公園以外は美津島町に設置されています。雑知から住吉神社までは約30分。途中で対馬空港、万関（橋・展望所）、玉調、大山を経由します。玉調には歌碑はありません。



遣新羅使・時代背景

663年の白村江の敗戦は、大和朝廷に大きな衝撃を与え、律令制の整備など中央集権化を促し、倭国が「日本」に生まれ変わる契機となりました。一方、新羅は朝鮮半島を統一したものの、大国・唐の圧力を一身に受け、日本と共同で唐に対抗する方法を探るようになり、日本と新羅の間に使節（遣新羅使）が往来するようになります。その後、朝鮮半島北部に渤海（ほっかい）が起こり、日本に使者を送ったため、日羅関係は三転、陰悪な霧囲気に陥ります。

悲劇の遣新羅使について

736年、阿倍継麻呂（あべのつぐまる）が遣新羅使大使に任命されましたが、新羅との関係悪化、前年の新羅使への対応（大宰府※での門前払い）などを考えると、はじめから達成困難が予想された任務でした。卜部の雪連宅満（ゆきのむらじやかまる）は壱岐で病没、継麻呂は外交使節としての礼遇を受けられず、帰路、対馬で客死します。副使の大伴三中也疫病により帰京が遅れるという有様でした。

万葉集第15巻に、対馬までの途上で詠われた和歌が多く残されていますが、新羅入国後は歌が詠まれず、帰路、播磨に達し、ようやく五首が記録されます。いずれも執念にも似た望郷の念が詠われており、帰路でただならぬ事態が起こったことを暗示しています。雪連宅満の死に際しては、「鬼病（えやみ）」と説明され、挽歌も残されていますが、継麻呂の死に関しては「卒す」とのみ記録され、挽歌も残されておらず、一説では、この外交使節の派遣は完全に失敗に終わり、継麻呂は対馬で自ら命を絶ったのではないかと推測されています。

※「ダザイフ」には、「大宰府」「太宰府」の2通りの表記がありますが、本冊子では歴史用語である「大宰府」を使っています。

観光スポット紹介「万葉の歌碑めぐり」

遣新羅使一行は、風待ち・潮待ちのため、浅茅湾東岸の美津島町玉調・小船越・竹敷周辺に5日間滞在したと考えられています。コースは、神社めぐりのP9～10で紹介されている場所とほぼ同じですので、ご参照ください。

また、防人の歌に関しては、金田城コースP12～15をご覧ください。



①竹敷の 浦みの黄葉 我行きて 帰ってくるまで 散りこすなゆめ

巻15-3702

上見坂（かみざか）公園（対馬市巖原町北里）

②竹敷の うえかた山は 紅の 八入（やしお）の色に なりにけるかも

巻15-3703

金比羅神社（対馬市美津島町竹敷）



③美津島町竹敷・たかしきのもみじ

遣新羅使の歌の多くは「たかしき」の浦で詠まれています。その場所は不明で、江戸時代に「竹の浦」と呼ばれた美津島町竹敷に比定されています。

遣新羅使一行の渡航は大幅に遅れ、帰郷して故郷で見るはずだった黄葉を、海が荒れ始める晩秋の竹敷で見ることになりました。一行は、やがて散りゆく黄葉に、死の予感すら感じていたのかもしれない。



④百船の 泊つる対馬の 浅茅山

しぐれの雨に もみたいにけり 巻15-3697
対馬グリーンパーク（対馬市美津島町雑知）



⑤竹敷の 玉藻なびかし 漕ぎ出なむ

君がみ舟を 何時とか待たむ 巻15-3705
（対馬娘子玉櫛）
対馬空港（対馬市美津島町雑知）



⑥潮干なば またも吾れ来む いざ行かむ

沖つ潮騒 高く立ち来ぬ 巻15-3710
万関橋（対馬市美津島町久須保）



⑦対馬の嶺は 下雲あらなふ 可牟の嶺に

たなびく雲を 見つづ偲はも 巻14-3516
万関展望台（対馬市美津島町久須保）

⑧美津島町玉調・玉櫛(たまつき)の歌

美津島町久須保の万関橋を過ぎると玉調浦が見えてきます。対馬で遣新羅使一行をもてなす宴が開かれ、対馬娘子玉櫛（つしまのおとめたまつき）が詠んだ歌2首が万葉集に残されています。

もみち葉の 散らふ山辺ゆ 榜(こ)ぐ船の
にほひに愛でて 出でて来にけり
（巻15-3704）

⑨秋されば 置く露霜に 堪えずして

都の山は 色づきぬらむ 巻15-3699
旧道大山入口（対馬市美津島町大山）



⑩紫の 粉漉(こがた)の海に 潜(かづ)く鳥
玉潜き出ば 我が玉にせむ 巻16-3870
住吉大橋 (対馬市美津島町鴨居瀬)

⑪百船の 泊つる対馬の 浅茅山
しぐれの雨に もみたいにけり 巻15-3697
対馬グランドホテル
(対馬市美津島町高浜)

※対馬の歌碑にはいくつか誤字があります。

上見坂公園 (対馬市巖原町北里) の歌碑 誤「紅葉」→正「黄葉」

大山旧道入口 (対馬市美津島町大山) の歌碑 誤「秋さらば」→正「秋されば」

観光スポット紹介 (オプション)「結石山 (ゆいしやま) の日本琴」



結石山(ゆいしやま)の日本琴

大伴旅人(おおとものたびと)は、山上憶良(やまのうえのおくら)とともに筑紫歌壇を形成した平安時代の貴族・歌人で、万葉集編纂に関わったとされる大伴家持(おおとものやかもち)の父です。こよなく酒を愛した人物として知られますが、旅人が大宰師として筑紫に赴任中に、当時中央の有力者であった藤原房前(ふじわらのふささき)に、対馬北部の結石山の梧桐で作った日本琴を贈っています。

こぼれ話「遣新羅使と怨霊」

奈良時代の貴族社会は、権力をめぐる暗闘が渦巻いていました。権力闘争に敗れた者は左遷、時には一族もろとも自害に追い込まれ、勝利した者も呪詛・怨霊などの敗者の報復に怯えていました。

729年、藤原四兄弟が皇族の長屋王を自殺に追い込んだとされる「長屋王の変」が起きますが、大伴旅人が四兄弟の一人・房前に献琴した年であり、翌年帰京を許されているため、何らかの政治的メッセージがあったようです。

長屋王を排した藤原四兄弟は権力を独占しますが、737年、都に疫病が蔓延。四兄弟を含む政府高官が次々に病没し、長屋王の怨霊の仕業だと恐れられました。(四兄弟のうち房前が最初に亡くなっています)

737年は遣新羅使が帰還した年であり、天然痘に罹患した一行が都に戻り、天然痘の蔓延と藤原四子政権の崩壊をもたらしたと考えられています。

聖武天皇は、仏教による人心の安定を図り、大仏建立の詔を発しました。蔓延する疫病、怨霊、反乱に悩み、仏教に救いを求めたのでしょうか。

5. 海の狼たちの攻防 元寇と倭寇



国境の島・対馬は、元寇など数度に渡り外国の侵略を受ける一方、豊臣秀吉の朝鮮出兵（文禄・慶長の役）では先陣として働くなど、常に日本と外国の緊張関係の影響を受け続けてきました。元寇・倭寇時代の対馬の攻防の歴史にふれるコースです。

コース所要時間・コース図

(S) 対馬観光物産協会 ←

↓ 徒歩 1分

① 長崎県立対馬歴史民俗資料館

↓ 車で25分

② 美津島町箕形・浅茅湾

↓ 車で10分

③ 美津島町加志・越前五郎の墓

↓ 車で7分

④ 美津島町尾崎・早田氏の拠点

↓ 車で30分

⑤ 厳原町小茂田・小茂田浜神社

↓ 車で3分

⑥ 榎根・法清寺のお胴塚

車で30分



コース説明

元寇では、日本は「神風」により侵略を免れたと言われますが、対馬・壱岐は全島にわたって甚大な被害を受けました。元寇への復讐の意味もあり、倭寇が盛んに朝鮮半島・中国大陸で略奪を行うようになっていきます。高麗は倭寇の被害が原因のひとつとなって滅亡、倭寇討伐で名をあげた李成桂が朝鮮（李氏朝鮮）を建国します。

朝鮮は「倭寇の巢窟」とされた対馬を襲撃（1419年応永の外寇）しますが、宗家のゲリラ戦により苦戦し、貿易の権限を対馬の有力者に与える懐柔策をとります。

こうして、対馬と朝鮮の関係は、元寇・倭寇の争いの時代から、平和通行の時代へと変化していきました。その平和な関係は、三浦の乱（朝鮮の日本人居留民の暴動）などの紆余曲折を経て、豊臣秀吉の朝鮮出兵まで続くこととなります。

観光スポット紹介「元寇ゆかりの地をたずねる」



①長崎県立対馬歴史民俗資料館

1977年に建設、翌年12月に開館し、島内の文化財、考古歴史資料、民俗資料、宗家文庫などの貴重品を収録展示しています。倭寇関係では、朝鮮国から対馬の有力者へ与えられた告身（官職授与状）があり、この時代の日本と朝鮮の交渉を示すものとして国の重要文化財に指定されています。
→資料館情報 P34



②浅茅湾(あそうわん)

対馬の中央に広がる浅茅湾は、複雑に入り組んだ海岸線と無数の島々が特徴のリアス式海岸です。湾内は、外洋の波浪や風の影響を受けにくく、倭寇にとっては格好の活動拠点でした。北欧のバイキングの活動拠点となったフィヨルドにも似ており、海の狼たちが好む地形は洋の東西を問わないようです。



③加志(かし)・越前五郎の墓

1274年の元寇（文永の役）では、対馬各地が戦場になりました。美津島町加志でも、宗資国（そうすけくに。宗家初代）の庶兄・越前五郎盛賢が討ち死にすると伝えられています。この石塔は後世（室町時代）に供養塔として建てられたと考えられています。



④尾崎(おさき)・早田氏の拠点

美津島町西部の尾崎地域は、倭寇の一大勢力であった早田氏の拠点の一つで、1419年朝鮮水軍による「応永の外寇」の際に真っ先に襲撃を受けました。早田氏は、朝鮮・中国・東南アジアにいたる広い交易圏を持ち、国境を超えて海上を移動する海洋民でした。



⑤小茂田(こもだ)浜神社

1274年の文永の役では、元・高麗軍3万3000のうち約1000人が佐須浦に上陸、それを迎え撃った宗資国以下80余騎が激戦の果てに全滅しました。資国はのちに軍神として祀られ、毎年11月に行われる小茂田浜神社大祭では、鎧武者たちがときをあげ、神主が海に向かって弓を鳴らす鳴弦の儀式が行われます。



⑥檜根・法清寺(ほうせいじ)のお胴塚

小茂田に近い檜根(かしね)の法清寺には、宗資国の「お胴塚」とされる小さな五輪塔があります。観音山にはお首塚が、銀山神社には太刀塚があり、元・高麗軍との戦いの激しさを伝えています。法清寺横の観音堂には、木造の平安仏や対馬六観音中もっとも美麗とされる千手観音が安置されています。

観光スポット紹介(オプション)「倭寇と佐賀(さか)三代」

応永の外寇により対馬と朝鮮の関係は一時悪化しますが、倭寇の活動に悩む朝鮮と、朝鮮貿易が生命線である対馬の間で、徐々に関係回復が模索されます。宗家7代・宗貞茂(さだしげ)から8代貞盛(さだもり)、9代成職(しげもと)が峰町佐賀に府を置いた60年間は「佐賀三代」と呼称され、宗家が朝鮮との外交・貿易関係を確立した時代でした。



⑦小船越・梅林寺(こぶなこし・ばいりんじ)

小船越は早田氏の拠点のひとつで、「応永の外寇」では尾崎に続いて朝鮮水軍の襲撃を受けました。外寇後、対馬と朝鮮の間で通行条約が結ばれ、朝鮮への渡航者はすべて宗氏の文引(証明書)が必要になり、対馬が朝鮮貿易において独占的な地位を占めるようになりました。梅林寺の僧・鉄観が文書の取り扱いにあつたと言われています。



○佐賀・円通寺(さか・えんつうじ)

円通寺は宗家8代貞盛の菩提寺で、本尊は「銅造薬師如来坐像」（13世紀、高麗仏）、鐘楼の梵鐘は李朝初期の朝鮮鐘と考えられています。

円通寺の前には、日朝の外交交渉で活躍した朝鮮の外交官「李芸」の碑が建立されています。李芸は多くの被虜人の送還に功がりましたが、倭寇に拉致された自身の母親には生涯会えませんでした。



○円通寺宗家墓所

円通寺の裏山の竹林に、一群の宝篋印塔（ほうきよういんとう）があり、無銘の供養塔であるため個々についての所伝は不明ですが、佐賀三代の宗一族のものだと考えられています。宗家10代貞国（さだくに）により国府が厳原に戻されるまで、佐賀は中心地として栄えました。

こぼれ話その1「フビライに謁見した対馬人」

元寇に先立ち、元は日本に使者を送りますが、第1回目の使者は巨済島で「風濤蹴天」（荒波が天を蹴る）の海を見て引き返し、2回目の使者は対馬で足止めされ、大宰府に至ることすらできませんでした。空手で帰れない使者たちは、対馬島民の「弥二郎と塔二郎」を拉致し、高麗經由で大都（北京）へ連れ帰りました。数ヵ月後、2人は無事対馬に護送され、島の人々を驚かせました。大帝国・元の首都を訪れ、皇帝フビライに謁見した2人の話を、島の人々はさらなる驚きとともに聞いたことでしょう。

こぼれ話その2「阿比留さんと宗さんと対馬さん」

対馬で一番多い名字は「阿比留」（あびる）です。出自については、上総国畔蒜（あびる）郡出身などいろいろな説がありはっきりしませんが、多久頭魂神社の鐘銘から約千年の歴史があることがわかっています。対馬島主・藩主の「宗」氏は、傍流が宗姓を名乗ることを禁じ、後裔は関東にご在住のため、現在、島内に宗氏の末裔はいません。

一方、島内にはほとんどいないのに、青森・北海道などに多いのが「対馬」さん。青森には「泣けばモッコが来る」という内容の子守唄があり、モッコ＝蒙古で、元寇の際に対馬を脱出した島民が津軽に住み着いたのではないかと、という説があります。また、江戸時代の「柳川事件」の際、対馬藩の家老・柳川調興が津軽に流されています。

江戸時代まで庶民には名字がなかった、という説もありますが、寄進帳などの記録から名字はあったと考えられ、津軽の「対馬」さんと対馬には、何らかの深い関係があるようです。

6. 秀吉の朝鮮出兵命令! 激動の対馬を旅する



豊臣秀吉による朝鮮出兵（文禄・慶長の役）と徳川家康による国交回復交渉の時代の史跡を徒歩でめぐりながら、日朝両国の平和的関係樹立のために対馬が苦闘した激動の時代にふれるコースです。

コース所要時間・コース図

(S) 対馬観光物産協会 ←

↓ 徒歩 1分

① 長崎県立対馬歴史民俗資料館

↓ 徒歩 5分

② 金石城跡

↓ 徒歩 1分

③ 旧金石城庭園

↓ 徒歩 5分

④ 宗家菩提寺・万松院

↓ 徒歩 10分

⑤ 西山寺

↓ 徒歩 5分

⑥ 巖原八幡宮神社

徒歩 3分



コース説明

16世紀末、元寇・倭寇という動乱の時代を経て朝鮮との平和通行の時代を迎えていた対馬に、時の天下人・豊臣秀吉から過酷な命令が下りました。

「朝鮮出兵の先陣となれ！」と。

対馬島主・宗 義智（そう よしとし）は、義父の小西行長とともに朝鮮に出兵し、6年におよぶ戦争に参加しました。秀吉の死により戦乱は終結したものの、豊臣家臣団は分裂。朝鮮に出兵しなかった徳川家康の台頭を招きます。関ヶ原の合戦で敗れた行長は処刑され、新たな天下人となった家康は国内外の安定を望み、義智に朝鮮との国交回復を命じました。日本を「不倶戴天の敵」と憎む朝鮮を相手に、若き島主・義智の対馬の存亡をかけた外交交渉が始まったのでした。

やがて、外交使節団「朝鮮通信使」が往来する平和な時代が訪れますが、この和平交渉にはある重大な「秘密」が隠されていたのです。

観光スポット紹介



① 長崎県立対馬歴史民俗資料館

1977年に建設、翌年12月に開館し、島内の文化財、考古歴史資料、民俗資料、宗家文庫などを収録展示しています。倭館絵図、朝鮮通信使行列絵巻、毎日記（宗家文書）、元禄対馬国絵図などの江戸時代の資料展示も充実しており、この時代の対馬について広く学ぶことができます。

→資料館情報 P34



② 金石城跡(かねいしじょうあと)

1665年、対馬藩三代藩主・宗 義真（よしざね）がそれまでの金石屋形を拡張・城郭整備を行い、1669年に櫓門を築いてからは金石城と呼ばれるようになりました。櫓門は文化年間の火災で焼失し、再建されましたが、大正時代にふたたび解体。現在の櫓門は、平成2年に記録に基づいて復元された3代目です。城跡は国の史跡に指定されています。



③ 旧金石城(きゅうかねいしじょう)庭園

宗家の居城であった金石城の庭園です。長年、土砂に埋もれた状態でしたが、発掘調査・復元工事の結果、近世庭園としては希少な意匠・構造をもち、また遺構の状態も良好であることが判明し、国の名勝に指定されました。2008年5月から一般公開されています。



④万松院(ばんしょういん)

2代藩主・宗 義成(よしなり)が、父・義智の冥福を祈って1615年に建立し、宗家の菩提寺として特別の崇敬を受けてきました。桃山様式の山門、徳川歴代將軍の位牌、朝鮮国王から贈られた三具足等が公開されています。百雁木(ひゃくがんぎ=132段の石段)を登ると、歴代藩主の壮大な墓所(御魂屋)が姿を現します。拝観料300円。



⑤西山寺(せいざんじ)

もともとは9世紀に創建された大日寺がその起源と伝えられ、1512年、宗家第10代・宗 貞国(そう さだくに)夫人の菩提寺となり、その法号にちなんで西山寺と改めました。江戸時代には、外交文書作成などを行う「以酩庵(いていあん)」が置かれており、外交で活躍した以酩庵開祖・景 轍玄蘇(けいてつげんそ)と、その弟子・規伯玄方(きはくげんほう)の彫像が残されています。拝観料100円。



⑥巖原八幡宮(いづはらはちまんぐう)神社

巖原の中心部にあり、古くから対馬藩主や島民の崇敬を集めてきた古社です。祭神は神功皇后・応神天皇など。境内には、初代藩主・宗 義智の妻、小西マリア(小西行長の娘)を祭った今宮若宮神社や、藩主が奉納した高蒔絵三十六歌仙額・太刀などを所蔵している宝物館(拝観料300円)があります。

観光スポット紹介(オプション)「国指定史跡・清水山城跡」

清水山城は、秀吉の朝鮮出兵(文禄・慶長の役)の準備のため、名護屋城(肥前唐津)・勝本城(壱岐)・撃方山(上対馬)・朝鮮半島へと連なる兵站線上の駅城のひとつとして、1591年に築かれた山城です。安土桃山時代の山城の貴重な遺構(曲輪(くるわ)、石垣)が清水山の尾根沿いに現存しており、国の史跡に指定されています。巖原港の北西に位置し、港からも三段状の曲輪を望むことができます。



○清水山城跡・三の丸

清水山の山頂から、一の丸・二の丸・三の丸の石垣が約500mにわたって残存しています。三の丸からは巖原市街地と巖原港、気象条件に恵まれれば水平線に浮かぶ壱岐を一望でき、ここに城を築いた意図がよくわかります。

観光スポット紹介（オプション）「豊臣秀吉、朝鮮出兵の道」



朝鮮出兵のルートを実際にたどるなら、佐賀県唐津市の名護屋城跡および名護屋城博物館を訪問してみましょう。大阪城に匹敵すると言われた広大な城跡は国の特別史跡に指定されており、天下人・秀吉の大陸進出の野望を実感させてくれます。

唐津東港から壱岐の印通寺港へ、壱岐の郷ノ浦港・芦辺港から対馬の厳原港へ、それぞれジェットフォイル、フェリーが就航しています。

人物伝



宗 義智(そう よしとし)

鎌倉時代から対馬を統治していた宗家の第19代島主で、小西行長の娘マリアと結婚し、自らもダリオという洗礼名をもつキリシタン大名でもありました。朝鮮出兵（文禄・慶長の役）、小西行長の処刑、キリスト教の棄教、マリアとの離別、朝鮮との和平交渉など、苦難に満ちた生涯を送りました。朝鮮との国交回復の功を徳川家康に認められ、対馬藩初代藩主となり、1615年に死去。同年、2代藩主・義成（よしなり）が、父の菩提を弔うために松音寺を建立し、義智の法号にちなんで万松院（ばんしょういん）と呼ばれるようになりました。

こぼれ話「対馬藩の繁栄と斜陽」

宗 義智と家臣団の懸命の努力により、日本と朝鮮は国交を回復し、朝鮮貿易が活発に行われるようになりました。時は平和な元禄時代。対馬藩が輸入する朝鮮人参は万能薬として人気を集め、また生糸は西陣織に加工されて消費され、島内の佐須銀山も最盛期を迎えており、対馬藩は「西国一の長者」と羨まれるほど豊かな存在でした。

ところが、徳川8代将軍・吉宗は、国内の銀の流出を問題視し、貿易の締め付けを開始。朝鮮人参の国産化にも成功し、朝鮮貿易は衰退の一途を辿ります。やがて、日朝両国とも財政難から朝鮮通信使を往来させることができなくなり、対馬藩の華やかな時代は終焉を迎えました。

貿易という翼をもがれた対馬藩は、幕府から借金を繰り返し、幕末に大国ロシアの不気味な影が対馬近海に伸びてくるまで、財政難にあえぐことになるのです。

6. 日露戦争と対馬砲台群



国境の島対馬は、現代に至るまで国防の最前線であり、特に明治期から第2次大戦期までは30を超える砲台が築かれ、対馬自体が海上の大要塞とも称されました。「坂の上の雲」（司馬遼太郎）で描かれた日露戦争・日本海海戦の時代を体験できるコースです。

コース所要時間・コース図

(S) 対馬観光物産協会 ←

↓ 車で3分（徒歩10分）

① 厳原町中村・半井桃水館

↓ 車で15分

② 厳原町北里・上見坂公園

↓ 車で10分

③ 美津島町雑知・住吉神社のロシア機雷

↓ 車で13分

④⑤ 美津島町竹敷・海軍要港部・深浦

↓ 車で20分

⑥ 美津島大船越・忠勇義烈の碑

↓ 車で7分

⑦ 美津島町久須保・万関橋

車で30分



コース説明 幕末～明治時代の対馬

幕末の文久元年（1861年）、対馬の中央に広がる浅茅湾の芋崎をロシアの軍艦ボサドニック号が占拠するという事件が起きました。幕府は外国奉行・小栗忠順（おぐりただまさ）を派遣するも交渉は難航。占拠から半年後、イギリス軍艦の圧力によりロシア軍艦は対馬から退去しましたが、自力で外国に対抗できない幕府の無力さを露呈した出来事となりました。

時は帝国主義の時代。南下政策をとるロシアは、冬に凍結するウラジオストック（ロシア語で「東方を征服せよ」の意）軍港の代わりに浅茅湾に目をつけ、一方のイギリスもまた、ロシアが退去しなければ自ら浅茅湾を占拠する計画だったといわれています。

その後もロシアは露骨な南下政策を続け、対馬近海の軍事的緊張は極度に高まりました。危機感を高めた伊藤博文・山県有朋らは対馬を視察し、「対馬ハ我西門ニシテ、最要衝ノ地」（山県）と復命、1887年には東京湾要塞に次いで対馬要塞の建造が始まります。明治政府は、日英同盟やロシア内の反政府勢力支援などの外交戦を展開しつつ、1904年（明治37年）に日露戦争に突入します。

日露戦争の日本海海戦において、東郷平八郎率いる連合艦隊は、ロシアのバルチック艦隊を一方向的に撃破、日本の勝利を決定的なものにします。対馬沖・日本海を主戦場としたこの海戦は、日本以外では一般的に「対馬沖海戦」（Battle of Tsushima）と呼ばれています。

観光スポット紹介



①半井桃水館(なからいとうすいかん)

半井桃水は明治期の新聞記者・小説家。対馬出身で、樋口一葉の師、思慕の対象として知られています。日露戦争時、従軍記者として水師營の会見を特報するなど活躍しました。桃水の出生地である巖原町中村地区は現在も城下町の風情を残し、生家跡はコミュニティ施設「半井桃水館」となっています。



②上見坂(かみざか)公園・上見坂堡壘

標高385mに位置する上見坂展望台からは、リアス式海岸・浅茅湾を眼下に一望できます。遊歩道を奥まで歩くと、明治後期に築かれた砲台跡が姿を現します。西海岸の小茂田（元寇の古戦場）方面からの敵の上陸を想定し、口径15センチの火砲が4基据え付けられていました。



③住吉神社のロシアの機雷

美津島町雞知（みつしまちけち）には対馬要塞重砲兵連隊が配備され、現在の雞知中学校には連隊の正門の柱が残っています。写真は、中学校近くの住吉神社境内にある鉄製の機雷で、ロシア艦からの戦利品として、竹敷（たけしき）要港部から戦勝記念に贈呈されたものと言われています。



④竹敷・海軍要港部跡

1886年（明治19年）、浅茅湾南部の竹敷港に水雷施設部が設置され、海軍艦艇が出入りするようになりました。日清戦争後、基地としての重要性が高まり要港部に昇格。要港部は、横須賀・呉・下関・佐世保・竹敷の5箇所で、他の港を見ると、対馬がいかに重要視されていたかが分かります。現在は海上自衛隊の対馬防備隊が置かれています。



⑤深浦（ふかうら）・水雷艇隊基地跡

日清戦争において、海軍大尉・鈴木貴太郎（のちの海軍大将・侍従長・第2次大戦終戦時の総理大臣）は水雷艇長として竹敷から出撃、戦果をあげ、水雷艇の重要性を世界に認識させるきっかけになりました。写真は、竹敷の深浦にある水雷艇隊の基地跡。「竹敷海軍要港部跡の石造施設群」は、（社）土木学会の「日本の近代土木遺産」でAランクに指定されています。



⑥大船越・忠勇義烈の碑

ポサドニック号事件に際し、大船越瀬戸を強引に通過しようとしたロシア兵との争いにより、松村安五郎が銃撃され死亡、吉野数之助が捕虜になり、その恥辱に耐えかねて死亡するという事件が発生しました。2人はのちに戦没者として靖国神社に合祀され、大船越に碑が建立されました。吉野数之助の碑の「義烈」の揮毫は陸軍大将・乃木希典。



⑦万関橋（まんぜきばし）

明治後期、南下政策をとるロシアとの戦争の機運が高まり、日本海軍は水雷艇を対馬海峡東水道に出撃させるため、1899～1901年（明治32～34年）、久須保水道（万関瀬戸）を開削しました。1905年の日本海海戦（対馬沖海戦）では、水雷艇隊が万関瀬戸を通して出撃し、日本の勝利に貢献しました。

観光スポット紹介（オプション）「対馬砲台群」



○姫神山(ひめがみやま)砲台跡

1900～1902年、モルタルと赤煉瓦をつかったイギリス風の砲台が、美津島町緒方（みつしままちおかた）の姫神山に築造されました。保存状態もよく、日露戦争の時代の息吹を感じさせるレトロな砲台です。対馬には31もの砲台跡が残っており、国防の最前線であった歴史を今に伝えています。

観光スポット紹介（オプション）「対馬のこころ」（上対馬町・鯨浦～琴）



○茂木浜(もぎはま)・殿崎(とのさき)

バルチック艦隊は対馬沖で壊滅し、上対馬町茂木浜にはナヒモフ号の、同町殿崎にはモノマフ号の敗残兵が漂着し、それぞれ島民の手厚い看護を受けました。殿崎には、連合艦隊司令長官・東郷平八郎の揮毫による「恩海義嶠」の記念碑があり、茂木浜には1980年に引き上げられたナヒモフ号の大砲が設置されています。



○豊(とよ)砲台跡

対馬海峡西水道の封鎖を目的に、昭和4年起工、昭和9年に竣工した鉄筋コンクリート製の砲台で、長さ18.5メートルの40センチ加農砲が2門装備され、コンクリート壁の厚みは2メートル以上。照明スイッチがあり、砲座・砲具庫・巻揚機室などの内部構造を観察することができます。

こぼれ話「竹敷と鈴木貫太郎」

1894～95年の日清戦争の頃、対馬・竹敷の水雷艇隊に若き鈴木貫太郎がいました。多くの国々が「眠れる獅子・清」の勝利を予測しましたが、日本は50tほどの水雷艇と魚雷の有効性に着目し、東洋最強とされた清の戦艦「定遠」（ドイツ製、7000t超級）を魚雷で攔座・自沈させ、勝利しました。10年後の日露戦争（日本海海戦）では、鈴木貫太郎はバルチック艦隊の進路に悩む秋山真之を激励、自らも第四駆逐隊司令として竹敷を出撃し、バルチック艦隊の残存艦（戦艦3隻、巡洋艦2隻）を撃沈する大戦果をあげました。2・26事件で青年将校に襲撃されるも一命を取り留め、第2次大戦末期には、昭和天皇の懇請により総理大臣に就任、戦争を終結させた8月15日に総辞職します。戦後も戦争続行派から命を狙われ、引越しを繰り返しながら、3年後に死去。「不死身の鬼貫」は、日本が世界の大国と戦い続けた明治～昭和期を現場で生き抜いた稀有な人物でした。

交流と国防の最前線・対馬の歴史年表

| 日本 | | 朝鮮 | 中国 |
|------|---|------|-------------|
| 縄文 | 対馬の縄文人、九州と朝鮮半島を往来（7000～8000年前） | | |
| 弥生 | 魏志倭人伝 に対馬国に関する記述が登場（3世紀） | 三韓 | 魏 |
| 古墳 | 美津島町難知に 畿内系古墳 が出現（4～6世紀） | 三国 | 普 隋 唐 |
| 飛鳥 | 遣隋使 小野妹子 一行、対馬に停泊（608） | | |
| 奈良 | 白村江の戦い （663）、 防人・烽 を置く（664）、 金田城 を築く（667） | | |
| 平安 | 遣新羅使 船が浅茅湾に停泊（736） 天台宗開祖・ 最澄 が対馬の阿連（あれ）に帰着（805） 「 延喜式（神名帳） 」まとまる（927） 女真族とされる賊船が対馬を襲撃「 刀伊の入寇 」（1019） | 新羅 | |
| 鎌倉 | 元寇（文永の役） 、宗 資国（初代）以下80余騎全滅（1274） 元寇（弘安の役） 、対馬の被害詳細は不明（1281） | 高麗 | 宋 元 |
| 室町 | 倭寇 の活動活発化 新羅仏・高麗仏・般若経などさまざまな 仏教文物 が渡来 宗 貞盛（8代）、朝鮮水軍による対馬襲撃「 応永の外寇 」（1419） 〃 朝鮮と関係回復 | 朝鮮 | 明 |
| 戦国 | 朝鮮半島の日本人居留民による暴動「 三浦の乱 」（1510） 三浦の乱後の関係回復 進む | | |
| 安土桃山 | 宗 義智（19代）、府中（厳原）に 清水山城 が築かれる（1591） 〃 文禄・慶長の役 参戦（1592、1597） 〃 関ヶ原の合戦で西軍につくも所領を安堵（1600） 〃 朝鮮へ使者を派遣、関係回復 を図る（1602） 〃 江戸期第1回 朝鮮通信使 来日（1607） | | |
| 江戸 | 宗 義成（20代、2代藩主）、国書偽造発覚「柳川一件」（1635） 宗 義真（21代、3代藩主）、 対馬藩の黄金時代 （17世紀半ば） 〃 清水山のふもとに 金石城 を築く（1669） 〃 釜山に10万坪の「 草梁倭館 」が落成する（1678～1873） 〃 雨森芳洲 、対馬藩儒として朝鮮外交に活躍（17世紀後半） | | 清 |
| 明治 | 陶山訥庵 の建議による猪狩り、全島の猪根絶（1700～1709） 最後の朝鮮通信使 （第12回）、対馬で国書を交換（1811） ロシア艦が芋崎を占拠した「 ボサドニック号事件 」（1861） 明治維新（1868）、版籍奉還・廃藩置県を経て 長崎県 に所属 対馬要塞第1期工事（1887～1888） 日清戦争（1894～1895） ロシアとの軋轢、竹敷が 海軍要港部 に昇格（1896） 対馬要塞第2期工事（1898～1906） 万関瀬戸 の開削（1899～1901） 日露戦争 （1904～1905）、 ロシア艦隊の敗残兵 を対馬島民が救助 | 大韓帝国 | |

宗氏（そうし）について

宗氏は、鎌倉時代に対馬の実権を掌握し、南北朝時代に島主となり、江戸幕藩体制下では対馬藩主、明治の華族令により伯爵に列した一族です。宗家600年の歴史は、交流と国防の最前線であった対馬の歴史そのものと言えます。

伝説 **宗** **重** **尚**

鎌倉時代に、対馬の豪族・阿比留氏を
追討するため筑前から入島、対馬を統治
したという伝説上の宗家初代。

元寇で壮絶に玉碎

武名高し
高麗と通行



朝鮮と交隣外交
佐賀開府

応永の外寇
大内氏と交戦

少武氏と決別
国府を厳原に

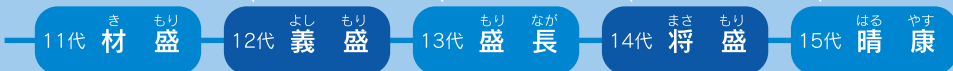


三浦の乱

宗氏の内紛

内紛続く

宗姓を嫡流のみに



朝鮮貿易拡大
秀吉九州征伐参戦

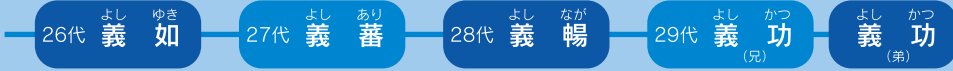
朝鮮出兵と和平交渉
関ヶ原の合戦

大阪夏の陣
柳川事件



朝鮮貿易最盛期
藩政の絶頂と衰退

幕末まで貿易不振、大火、お家騒動などの衰退期を迎える



世継ぎ騒動

最後の藩主・伯爵



参考：「対馬国志」第2巻
(永留久恵 著)

資料館情報

長崎県立対馬歴史民俗資料館



展示室には考古・民俗・歴史資料約100点と対馬に棲むツシマヤマネコをはじめ6体の動物の剥製を展示し、収蔵庫には宗家文庫史料約7万点並びにその他の史料約3万点が保管されています。

〒817-0021 長崎県対馬市厳原町今屋敷668-1
TEL 0920-52-3687

開館 午前9時～午後5時

入館料 無料

休館 月曜日（祝日の場合は翌日）
年末年始（12月28日～1月5日）
資料整理期間（年1回、10日間）

豊玉町郷土館



豊玉町の縄文時代から古墳時代の遺跡（シゲノダン遺跡、佐保唐崎遺跡、ヌカシ遺跡・住吉平貝塚、貝鮚崎古墳・クワバル古墳）から出土した考古資料を中心に展示しています。

〒817-1201 長崎県対馬市豊玉町仁位370
TEL 0920-58-0062

開館 午前9時～午後5時

入館料 無料

休館 月曜日、国民の祝日の翌日および年末年始

峰町歴史民俗資料館



峰町の遺跡（山辺遺跡、佐賀貝塚、チゴノハナ遺跡、井出遺跡、小姓島遺跡、ガヤノキ遺跡）から出土した考古・民俗資料を中心に展示しています。「佐賀貝塚」から出土した「鹿笛（しかぶえ）」は、狩猟文化を研究する上で第一級の資料です。

〒817-1301 長崎県対馬市峰町三根451
TEL 0920-83-0151

開館 午前9時～午後5時

入館料 無料

休館 年末年始

上対馬町歴史民俗資料館



上対馬町の歴史と文化財を紹介しています。塔の首遺跡の広鋒銅矛（複製）や遺跡の復元模型、朝日山古墳群、経隈墳墓、コフノサエ遺跡などの貴重な出土遺物を公開しています。

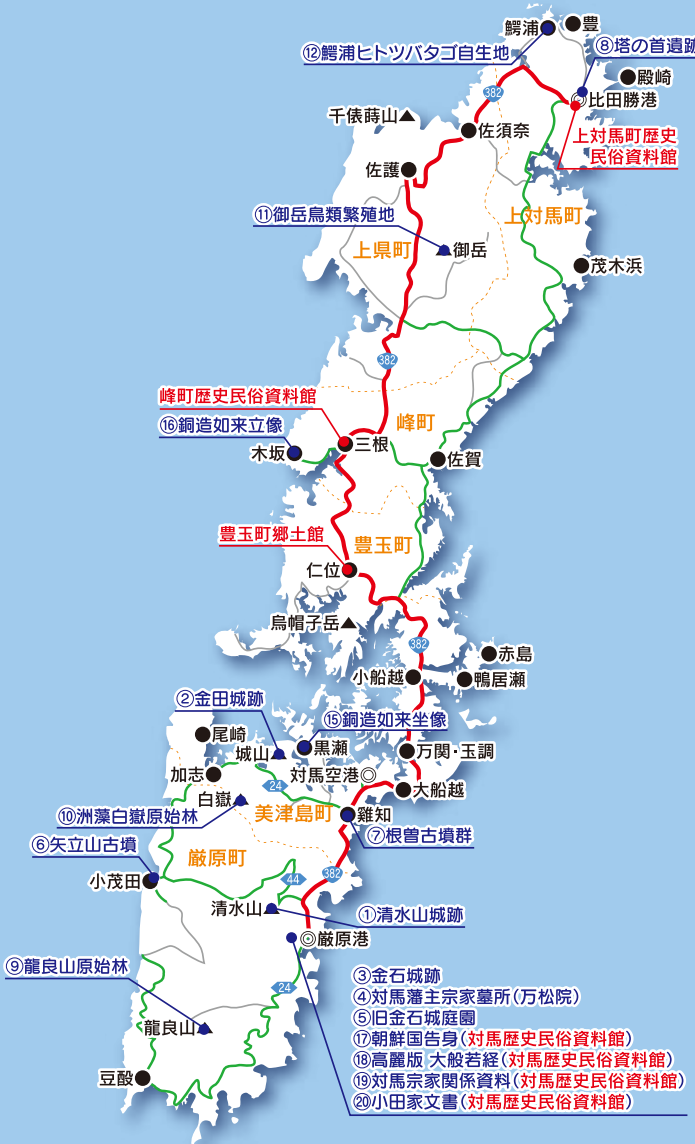
〒817-1701 長崎県対馬市上対馬町比田勝575-1
TEL 0920-86-3052

開館 午前9時～午後5時

入館料 無料

休館 土日祝日及び年末年始

対馬市の文化財（国指定のみ一部抜粋）



山城

- ①清水山城跡
（厳原町西里）
- ②金田城跡
（美津島町黒瀬）

宗家関係

- ③金石城跡
（厳原町西里）
- ④対馬藩主宗家墓所
（厳原町西里・万松院）
- ⑤旧金石城庭園
（厳原町今屋敷）

古墳・遺跡

- ⑥矢立山古墳
（厳原町下原）
- ⑦根曾古墳群
（美津島町雞知）
- ⑧塔の首遺跡
（上対馬町古里）

天然記念物(山岳)

- ⑨龍良山原始林
（厳原町豆酸）
- ⑩洲藻白嶽原始林
（美津島町洲藻）
- ⑪御岳鳥類繁殖地
（上県町瀬田）

天然記念物(動植物)

- ⑫鱧浦ヒトツバタゴ自生地
（上対馬町鱧浦）
- ⑬ツシマヤマネコ
- ⑭ツシマテン

仏像

- ⑮銅造如来坐像
（美津島町黒瀬）
- ⑯銅造如来立像
（峰町木坂・海神社）

書跡

- ⑰朝鮮国告身
- ⑱高麗版 大般若經
- ⑲対馬宗家関係資料
- ⑳小田家文書
（厳原町今屋敷・対馬歴史民俗資料館）

詳しくは、対馬市教育委員会文化財課

TEL 0920-54-2341

<http://www.city.tsushima.nagasaki.jp/culture/>

※⑭ツシマテンは全島に分布しています。⑬ツシマヤマネコは主に対馬北部に分布していますが、近年、南部でも確認されています。



国境の島 対馬へおでかけの前に

対馬観光物産協会

〒817-0022

長崎県対馬市厳原町国分1441対馬市役所1F

TEL 0920-52-1566 / FAX 0920-52-1585

<http://www.tsushima-net.org>